研究者のための＋αシリーズ Vol.22
Create Your Research World
―あなたの力で新しい世界をきりひらく―

（2023 年 12 月 20 日（水）14:30～16:00 開催）

【Q＆A 集】

イベント終了後アンケートでいただいたご質問

【Q1】イベント運営業務に時間を割いてでも自身の名前の visibility が上がることに意味があり、共同研究につながるということ、大いに共感致しました。一方で、ある程度自身の研究内容・成果が出ていないと売り込む内容が少なく、visibility が上がるメリットが薄いようにも感じるのですが、どのぐらいのタイミングで運営業務に飛び込むのが適切と考えられますでしょうか。各先生にご意見を伺えますと幸いです。

【A1】

- **富田先生：**各コミュニティにおいて多少の違いはあるでしょうが、研究者にはキャリアステージに応じて求められる役割があり、それに合わせて世界を広げていく戦略が必要かと思います。御指摘の通りまずは優れた研究業績があることは当然大事と思います。学生から PD 初期は自身の研究成果や研究者としての成長がまず重要と思いますが、例えば助教になるには助教としての役割を果たせることを証明する必要があり、准教授になるには准教授としての役割を果たせることを証明する必要があります。そのためにはこのような対外的な仕事を責任を持って果たせるというのは一つの能力を証明する要素として評価の対象になると思います。(逆に、論文を沢山書けば教員になれるというわけではない、ということも認識しておく必要があるかと思います。)
  今リーダーシップを取っている人々の中には学生時代からそうだったという人も少なからずいますが、どこまでできるかはその人の能力や適性次第な面もあるので画一的な答えがあるわけではありません。ただ私自身の個人的な経験からは、PD の途中くらいからは自身の研究だけではなくより幅広い貢献を意識して戦略的な立ち振る舞いをすると、研究者としての成長やキャリアを構築していく上でも役に立つのではないかと考えています。

- **高安先生：**優れた研究成果があるに越したことはないですが、大学院生など研究を始めた段階で、日本の殻を飛び出していくのも自身の飛躍に役に

立つと思います。研究の内容と合わせて、海外での研究の方法や思想に触れる機会は大変貴重なものです。正直な話、研究の仕方については海外の一流研究室の方が優れている場合も多いです。一方で、日本で研究活動をされている方は世界とは違った着眼点を持っている場合も多く、海外に出ると途端に注目が集められるケースもあります。自分の気持ちに正直になって、自分が行きたいと思ったら即チャレンジしてみるのをお勧めします。どの分野でも意外と好意的に迎えてくれると思います。研究者は研究をしたい人を拒みません。

- **南宮先生：**私も画一的な解はないかと思います。ただ、日本の研究者は奥ゆかしい面を見せてしまい、必要以上に表に出ない面があるのかもしれません。visibility を上げることで、それまでは予想もしていなかったチャンスは確実に上がりますし、いい意味で自分に緊張感が生まれ、productivity が上がる面の方が強いのではないかと思います。ただ、自戒を込めて申しあげますと、過度に効率性などは鑑みず、自分の目標や成し遂げたいことに向かっては、あらゆる手段を使ってアプローチするのが研究者のあるべき姿かなと考えます。

- **竹村先生：**分野によってキャリア形成のタイムラインがかなり違うので一般的なことは言えませんが、私の分野でしたら博士号取得後 5 年目ぐらいからは意識し始めても良いと思います。学位取得後のすぐの時期は、ご自身の研究に打ち込むことでスキルアップすることが重要であることは疑いの余地はありませんが、一方で博士号取得後 5 年目以降は准教授や国研のチームリーダーなど、管理職ポジションにどうやったらなれるのかも並行して意識することも重要であると思います。ただ、大学院生の方でも各学会の「若手の会」での運営や、所属大学院のリトリートの運営などで運営業務の経験をしっかり積まれる方もおり、そういった活動も長期的にはとても役に立つと思います。最終的には研究者としてどの程度を自分の研究に割くのはキャリア上の個人の判断であるとは思いますが、少しでもご参考になりますと幸いです。